

第十五章 否定・倒置・語順・強調

否定

レクチャー1

強意の否定表現。

強意の否定表現とは、「決して～ない」「全く～ない」「どうしても～ない」といった表現のことで、「決して」「全く」「少しも」「どうしても」などのフレーズで、否定の意味を更に強めるものです。それぞれきちんと整理しておきましょう。

(1) 「決して～ない」のいろいろな表現。

① never

=not~ever

(ex) You should never walk alone at night.

夜の一人歩きは決してしてはいけない

She never goes out.

彼女はちっとも外出しない

《もう一歩深く!!》

日本語でいくら「決して～ない」と表現できたとしても、単にその一時だけのことを表現するには never は普通使わない。その場合には not ~at all(又はそのイコール表現)を用いる。つまり never は「習慣性」「経験」を含意する。

したがって「私は決してその結果に満足していない」という場合、そこに「習慣性」「経験」が含意されているとは言い難いので、

I am never satisfied with the result.

とは言わずに

I'm not satisfied with the result at all[by any means].

I am by no means satisfied with the result.

となどと表現するのが一般的である。

② on no account ㊦ account は「理由」という意味。

=not ~ on any account

(ex) You must on no account do such a silly thing.

そんなバカなことは絶対にしてはいけない

③ in[under] no circumstances ㊦ circumstances は「状況」という意味。

=not ~ in[under] any circumstances

(ex) Under no circumstances should you tell another lie.

いかなる事があっても二度とうそをついてはならない

④ in no sense[way/ respect] ㊦ sense は「意味」、way[respect]

=not ~ in any sense[way/ respect] は「点」という意味。

(ex) You should in no sense walk alone at night.

決して夜1人で歩いてはいけない

(2) 「まったく[少しも]~ない」のいろいろな表現。

① not~at all

(ex) I'm not hungry at all.

少しも腹がへってない

② far from～

(ex) I'm far from satisfied with the result.

私はその結果に全く満足していない

③ not a bit (of it) cf; not a little「少なからず、非常に」

(ex) I'm not a bit tired.

少しも疲れていません

④ not～in the least

(ex) She was not pleased in the least.

彼女は少しも喜んでいなかった

⑤ anything but～

(ex) My wife is anything but a good cook.

私の妻は料理がまるきりへたです

⑥ by no means～

=not ～ by any means

(ex) I am by no means satisfied with the result.

その結果には全然満足していない

⑦ in no way

(ex) I in no way regret my choice to have a child.

私は子どもを持ったことに後悔していない

⑧ no ～ whatever[whatsoever]

(ex) There is no doubt whatever.

何の疑いもない

上例のように、通例否定・疑問文で、no, any, allなどを伴う名詞の後で、それを強調する whatever があります。意味は「少しも～も」で at all や

whatsoever, of any kind と言い換えられます。

(ex) My wife has no sense of direction whatever[whatsoever].

私の妻は全くの方向音痴です

Is there any chance whatever of our survival?

我々が生き残る見込みは少しでもあるだろうか

(3) no～は「少しも～でない」「決して～ない」。 =not～any

(ex) I had no money.

私は全くお金を持っていなかった[一文無しかった]

=I didn't have any money.

また no は「This[It, He, She…] is no A.」の形で、「決してAではない、Aどころではない」という強い否定を表します。

(ex) Mr. Jones is no teacher.

ジョーンズ氏は教師などでは決してない[教師の資格などない]

上例は、職業としてはジョーンズ氏は「教師」であることを暗に示しています。
ちなみに

(ex) Mr. Jones isn't a teacher.

ジョーンズ氏は教師ではない

は、単に教師であることを否定しているのみ(つまり「教師以外の職業である」となります)。

(4) neither A nor B は「AもBも両方～でない」。

neither～は「両方とも～ない」。

(ex) Neither she nor I am fond of such people.

彼女も私もそのような人達を好まない

☞ neither A nor B という場合の neither は品詞的には「接続詞」になる。

Neither movie is interesting.

どちらの映画もおもしろくない

☞ 「neither+名詞」という場合の neither は品詞的には「形容詞」になる。

Neither of the houses has been lived in.

どちらの家にも人は住んでいない

會単独で用いられる neither は品詞的には「代名詞」になる。

(5) cannot を強調する for the life of A(人)。

for the life of A(人) は cannot を強調して「どうしても(～できない)」という意味になります。例をあげてみましょう。

(ex) I could not understand what he said for the life of me.

どうしても彼の話を理解できなかった

I cannot for the life of me remember her address.

どうしても彼女の住所が思い出せない

(6)強意の副詞としての simply。

S+simply+助動詞+not+V[原形]～

という形で、simply[really/ just]が「全く～(ない)」「どうしても～(ない)」という意味の強意の副詞として使われることがあります。

(ex) I simply[really] don't know what happened.

何が起こったのか全く知らなかったのです

I simply cannot solve this problem.

この問題がどうしても解けない

《演習》 次の2つの文を比較せよ。

(1) I don't really like Nancy.

(2) I really don't like Nancy.

【解説】 (1)は、「実際、実のところ」という意味で文全体を修飾している。

訳は「私はナンシーがあまり[実のところ]好きではない。

(2)は、強意の副詞として使われている。訳は「私はナンシーが大嫌いだ」。

レクチャー2

「far from A:全くAではない」と「free from A:Aがない」の区別の仕方。

④第十四章 形容詞・副詞の「レクチャー7」を参照せよ。

レクチャー3

「ほとんど～ない」と「滅多に～ない」。

④第十四章 形容詞・副詞の「レクチャー11」を参照せよ。

レクチャー4

否定語を含まない否定表現。

否定語を含まない否定表現は、文法・読解問題で超頻出です。理由は否定語が
ついていないだけに、それが否定表現であることを見落としてしまいやすいか
らです。しっかり整理しておきましょう。

(1) anything but ~ 「全く～ない」

(ex) The man was anything but a gentleman.

その男は全く紳士なんかではなかった

《もう一歩深く!!》

all, every, no, any(とその合成語), none などとセットで用いられる but
は「～以外(に・で)、～を除いて」という意味になる。

(ex) Everybody but me was surprised.

=Everybody was surprised but me.

私の以外はみんな驚いた

They all slept but me.

私のほかは全員眠った

She did nothing but complain. ☞「彼女は不平を言う以外は何もなかった」が直訳。

彼女は不平ばかり言っていた

そうすると The man was anything but a gentleman. は、直訳は「その男は紳士以外のいかなる者だった → 紳士(だけ)ではいささかもではなかった → 全く紳士なんかではなかった」となる。

(2) far from ~ 「全く～ない」

(ex) She is far from (being) satisfied with the result.

彼女はその結果には全く満足していない

(3) free from ~ 「～がない」

(ex) The plan is free from danger.

その計画には全く危険がない

(4) the last (person/thing等) to do[願]～/関係詞節～ 「決して～ない」

(ex) He is the last man to betray you.

彼は決して君を裏切りはしない

Tom was the last person (that) I expected to see there.

そこでトムに会うなんて全く予想外だった

(5) fail to do[願]～ 1. 「～しない」 2. 「～できない」

(ex) She failed to appear.

彼女は現われなかった

=She didn't appear.

I fail to see the reason.

その理由が僕には分からない

=I cannot see[=understand] the reason.

(6) beyond ~ 「(範囲・限界が)~を超越している、~よりすぐれている、
above ~ ~の及ばない」

beyond[above]~の元々の意味は「~を超越している」。そこから「~の力が及ばない」「(非難・賞賛等)を超越している」という意味が出てきたのです。これは more than S+V~で書き換えることができます。

(ex) What he did is beyond[=above] my understanding.

=more than I can understand

彼のしたことは私の理解を超越している(越えている)

→彼のしたことを理解できない

She is above[=beyond] telling a lie.

=She never tells a lie.

彼女は嘘をつくような次元を超越している

→彼女は決して嘘をつくような人ではない

(7) know better than A(名) / to do[原形]~ 「A/~するほどバカではない」

(ex) I know better than to tell the truth easily.

俺は簡単に本当のことを言うほど馬鹿じゃないよ

(8) remain to do[原形]~ 「いまだ~していない」

☞ remain to be+p.p. となることも多い。下の例文もその形で使われている。

=be[have] yet to do[原形]~

(ex) The task is almost completed, but a few things remain to be done.

その仕事はほぼ完成したが、まだ2、3しなければならないことがある

He is[has] yet to know the truth.

彼はまだ真実を知っていない

《もう一步深く!!》

1. remain to do[原形]~ の覚え方。

remain には remain C(形・名・分)で「(依然として)Cのままである」という語法がある。そのCに to do[原形]~(これから~すべき)が入ったと考えると良い。

つまり「これから(まだ)~すべきままである⇒(現状では)まだ~していない」となる。

to do[原形]~(これから~すべき)
↓
remain C
「(依然として)Cのままである」

2.be yet to do[原形]~の覚え方。

be yet to do[原形]~は、be to do[原形]~というbe to 構文(この場合は「これから~する予定である」という意味)に、「いまだ」という意味の yet が割り込んだものと考ええると良い。そこで「いまだこれから~する予定である⇒(現状では)まだ~していない」となる。

yet(いまだ)
↓
be ___ to do[原形]~
「(これから)~する予定である」

3.have yet to do[原形]~の覚え方。

have yet to do[原形]~は、「(これから)~しなければならない」という have to do[原形]~に、これまた「いまだ」という意味の yet が割り込んだものと考えると良い。そこで「いまだ(これから)~しなければならないものだ⇒(現状では)まだ~していない」となる。

yet(いまだ)
↓
have ___ to do[原形]~
「(これから)~しなければならない」

(9)修辭疑問

形は疑問文なのに、内容は疑問文ではないという英文があります。これを修辭疑問と言います。理解しやすいように、まず日本語の例を下に示してみました。

「やつが負けるなんてことがあるだろうか(いやない)」

確かに形は疑問文ですが、内容的には疑問文ではありませんね。
英語におけるこの種の表現については、例文をたくさん見ることで慣れるのが一番です。以下にそれをあげてみました。

(ex) Who knows what will become of the world?

この世界がどうなるかなんて誰が知っていようか(いや誰も知らない)

=No one knows what will become of the world.

What is the use of demanding an explanation from them?

彼らに説明を求めて何の役に立つだろうか(いや何の役にも立ちたくない)

→彼らに説明を求めても無駄だ

=It is no use[good] demanding an explanation from them.

How can I ever thank you?

どうしたらあなたに感謝の気持ちを表せるだろう(いやできない)

→お礼の申し上げようもありません

=I don't know how to thank you.

=I cannot thank you enough.

Who will believe such an absurd rumor?

誰がそんな馬鹿げた噂を信じるだろうか(いや誰も信じない)

Can I ever forget her kindness?

彼女の親切を忘れることができようか(いやできない)

Does it matter?

それは重要だろうか(いや重要ではない) → そんなことかまうもんか

ただし、その英文が普通の疑問文なのか、修辞疑問なのかを文脈・状況・イントネーション等で判断しないとイケない場合もありますから、注意は必要です(しかしこれは日本語でも同じですね)。

部分否定。

部分否定とは「～というわけではない」と訳すもののことですが、どういう場合にこれが起きるかということがわかっていれば、部分否定の表現をすべて暗記する必要はありません。

では、それはどういう場合かというと、「例外がない[例外を認めない]ような形容詞・副詞(「すべて」「完全に」「いつも」「必ず」等)に not がついたとき」に起きる(つまりその場合に「～というわけではない」という意味がつけ加わる)のです。

- (1) not+all 「全て～というわけではない」
- (2) not+every 「 " 」
- (3) not+both 「両方～というわけではない」 ⚠️ちなみに「両方(とも)～ない」は neither
- (4) not+always 「いつも～というわけではない」
- (5) not+necessarily 「必ずしも～というわけではない」
- (6) not+altogether 「まったく～というわけではない」
- (7) not+entirely 「 " 」
- (8) not+wholly 「 " 」
- (9) not+quite 「 " 」

[その他] absolutely「完全に」 exactly 「正確に」 each 「それぞれの」
 whole 「全体の」 completely「完全に」 generally 「たいてい」

(ex) The rich are not always happy.

金持ちが必ずしも幸福とはかぎらない

I don't know both his parents.

私は彼の両親を両方とも知っているわけではない

Expensive clothes are not necessarily good ones.

高価な服が必ずしも良い服とはかぎらない

レクチャー6

二重否定。

数学で「マイナス×マイナス＝プラス」になるように、英語でも二重の否定は(強い)肯定になります。以下は二重否定を用いた決まり文句です。

(1) never[can't] do[原形]～ without doing… 「～すれば必ず…する」

(ex) They never meet without quarreling.

彼らは会えばいつも喧嘩する

=They can't meet without quarreling.

=Whenever they meet, they quarrel.

(2) never fail to do[原形]～ 「必ず～する」 [習慣的行為]

hardly[scarcely] fail to do[原形]～ 「必ずと言っていいほど～する」

(ex) My father never fails to read the newspaper before breakfast.

父は必ず朝食前に新聞を読む

(3) don't fail to do[原形]～ 「必ず～する」 [一回限りの行為]

(ex) Don't fail to post this postcard.

必ずこの葉書をポストに入れてくれ

=Be sure to post this postcard.

=Don't forget to post this postcard.

=Remember to post this postcard.

レクチャー7

その他の注意すべき否定の慣用表現。

(1) cannot～too… 「～して[であって]…しすぎる[でありすぎる]ことはない」

このイディオムは、解釈問題などで意味を理解するのに苦労しますね。そこでこれを解決する裏技は、この表現は「命令文」あるいは「should+do[原形]～」で

書き換えられる、と覚えておくといいでしょう。

(ex) You cannot be too careful in choosing your friends.

=Be (very) careful in choosing your friends.

=You should be (very) careful in choosing your friends.

友だちを選ぶのに注意してしすぎることはない [注意すべきだ]

You cannot know too much about the language you speak everyday of your life.

=You should know much about ~.

我々が日常話す言葉についていくら多く知っていても知りすぎることはない [いくら知識があってもいい / 知識はたくさん持つべきだ]

(2) not~until... 「...して(になって)はじめて～」

(ex) I didn't know the news until last night.

昨日の夜までその知らせを知らなかった

→ 昨日の夜になって初めてその知らせを知った

否定文の後に until+A(語・句・節)が続く場合、直訳は「A(する)まで～しない」ですが、「Aして[になって]初めて～する」と訳すと、上例のようにこなれた良い和訳になります。

更に上記の英文は、「It is not until... that S+V～」で書き換えることができます。これは not until...を強調した強調構文です。

→ It was not until last night that I knew the news.

そして更に「It is」と「that」を省略して、Not until...を文頭に出す書き換えも可能です。ただしその場合、主節の部分は「疑問文と同じ語順」になる(つまり倒置が起きる)のがルールです。

→ Not until last night did I know the news.
[疑問文の語順]

(3) 「まもなく～するだろう」

① It will not be long before S+V～. 「まもなく～するだろう」

(ex) It won't[will not] be long before he can speak English.

すぐに彼は英語を話せるようになるだろう

② It was not long before S+V～. 「まもなく～した」

(ex) It was not long before I realized the trick.

まもなく私はその計略に気付いた

=I realized the trick before long.

=I realized the trick soon.

この表現は、上例のように before long または soon を使って書き換えられます。

倒置

倒置(Inversion)とは、S(主語)とV(動詞)が、その通常の語順である「S+V」から、

- ①文法上の理由
- ②ある語句を強調するため

といったことが原因となって、「V+S」の語順や疑問文の語順になることを言います。

様々な倒置のルールとパターンを、一つ一つ見ていくことにしましょう。

レクチャー1

(準) 否定の副詞の倒置。

(動詞を修飾する) 「(準)否定の副詞(句・節)が文頭に飛び出すと、その後の主節部分は「疑問文と同じ語順」になる」というルールがあります。

☞「主節」とは接続詞等のついていない裸の「S+V」のこと。

(準)否定の副詞(句・節) + 疑問文と同じ語順
[主節]

「(準)否定の副詞(句・節)」とは、以下のようなものです。

- ①否定の副詞(句)・・・ never「決して～ない」
on no account「決して～ない」
in no sense[way/ respect]「決して～ない」
in[under] no circumstances「決して～ない」等

- ②準否定の副詞(句)・・・ little「ほとんど～ない」 rarely「めったに～ない」 hardly「ほとんど～ない」
 few「ほとんど～ない」 scarcely「ほとんど～ない」 not until「～して初めて」
 seldom「めったに～ない」 only「～して初めて、～のみ[しか]」
 no sooner「ほとんど～ない」 等

このルールを逆に利用して、「(準)否定の副詞(句・節)」が文頭に飛び出した英文に出くわした場合、「疑問文と同じ語順になっている箇所」がその英文の主節だと判断できることも、読解問題などでは大切です。

① 「[否定の副詞] + 疑問文の語順(=主節)」パターン。

(ex) Never[Little] did I dream that she would win the contests.

彼女がコンテストで優勝するとは夢にも思わなかった

Hardly had she left home when it began to rain.

彼女が家を出たとたん雨が降り出した

② 「[否定の副詞句] + 疑問文の語順(=主節)」パターン。

(ex) In no circumstances will I allow you to go there.

いかなる事情があろうとも私は決して君がそこへ行くことを許さない

In no other part of the world is more tea consumed than in Britain.

世界中で英国ほど紅茶を飲む所はない

③ 「[否定の副詞節]+疑問文の語順(=主節)」パターン。

(ex) Not until we lose our health do we realize its value.

健康を失ってはじめてそのありがたさがわかる

罫 Not until +A(語・句・節)で「Aして[になって]初めて」。

特に解釈などで、「not only A but also B:AだけではなくてBもまた」の構文で、not only が文頭に出て、Aに当たる部分が「疑問文の語順」になるというパターンがよく出題されますから要注意です。

(ex) Not only does Tom say what should be said but also he does what should be done.

トムは言うべきことを言うだけではなく、やるべきこともまたやる

only は「時」「方法」を表す語句とセットで「～して初めて[ようやく]」という意味になり、これも文頭で「only+句」「only+節」の形でよく使われ、その後の主節は「疑問文の語順」になります。

(ex) Only afterward did he explain why he did it.

あとになって初めて、それをやった理由を彼は説明した

Only in that way did they manage to get their destination.

その方法によってはじめて、彼らは目的地に到着することができた

Only on one point do I agree with you.

ただ1点でしかあなたとは意見が一致しない

Only when it rains do you feel cool.

雨が降る場合しか涼しく感じない

レクチャー2

「Sもまた～しない」「Sもまた～する」。

(1)基本ルール。

肯定文の後ろで「So V+S」という形で「Sもまた～だ」、否定文の後ろで「Nor[Neither] V+S」という形で「Sもまた～ない」という意味を表します。

- | | |
|---------------------------|---------------------------------|
| ① S ₁ +V～ | ⇒ So+V+S ₂ |
| 「S ₁ は～だ」[肯定] | 「S ₂ もまた～だ」 |
| ② S ₁ +not+V～ | ⇒ Neither[Nor]+V+S ₂ |
| 「S ₁ は～ない」[否定] | 「S ₂ もまた～でない」 |

注意してほしいのは、So や Neither[Nor] の後の動詞は前の文の動詞の種類に合わせるという点です。

前の文の動詞		SoやNeither[Nor]の後の動詞
一般動詞	→	do/does/did
be動詞	→	be動詞
完了形	→	have/has/had

(2) 引っかけ問題。

以下のような引っかけ問題に注意が必要です。

A: Are you pressed for money?

B: So ().

- ① am I ② I am ③ do I ④ I do

この問題の正解は②になります。実は「So V+S」とよく似た表現に「So S+V」というのがあります。これは前述の内容を受けて「(Sはその通りです)」「おっしゃるとおりです」という、「同意・確認」を表す表現です。「So V+S」との見極め方は以下の通りです。

- ① 「So V+S」は、直前の文[節]の「主語」と、「So V+S」の「S」は同一(人物)にならない

(ex) A: He is a teacher. 彼は教師です

B: So am I. 私もまた教師です ☞ He ≠ I

確かに上の英文のAの主語(He)と、Bの主語(I)は別人物ですね。

- ② 「So S+V」は、直前の文[節]の「(意味上の)主語」と「So S+V」の「S」は(人物)となる

(ex) A: I think you are in trouble. 君は困っているんじゃないかい

B: So I am. その通りです ☞ you = I

確かに上の英文のAのbe動詞の主語(you)とBの主語(I)は同一人物ですね。(直前の文中に置ける、「So S+V」の「V」と)同種の「V」の主語との関係を見る。したがって上の例文でも「So S+V」の「V」がbe動詞(am)だったので、直前の文中のそれと同種の「V」である are の主語(you)に着目するのだ)。

☞ただ「A=Bとみなす[言う]」型の英文では「A = (So S+Vの)S」となることがある。以下の例文の consider は、consider A to be B で「AをB(A=B)とみなす」型の動詞。

(ex) A: We all consider you to be a jazz freak.

ボクたちみんな君のことをジャズオタクだと思っています

B: So I am ☞ You = I

その通りです

レクチャー3

その他の倒置の公式。

(1)一般の副詞(句)を強調するパターンの倒置。

「運動の方向(down, up, in, out, off等)」や「場所」(場合によっては「時」)などを表す副詞(文法用語でM)が文頭に置かれると倒置が起こります。そんな「S+V+M」の倒置の公式は以下の通りです。

① M+V+S

② M+S+V (主語が代名詞の場合)

つまりMが文頭に移動すると、SとVの語順がひっくり返るのです。

ただしSが代名詞の場合は、たとえMが文頭に移動しても倒置は起きません。

例文をいくつかあげてみましょう。

(ex) Down came the rain.

M V S

雨が降ってきた

Back came the answer from him.

M V S

彼から返事が返ってきた

At the foot[ふもと] of a hill stands our school.

M V S

丘のふもとにわが校は建っている

Down it came. ☞ 主語が代名詞の場合は「M+S+V」の語順になる。

M V S

それが落ちてきた

(2) 「S+V+C」のC(補語)を強調するパターンの倒置。

「S+V+C」の「C」が文頭に飛び出した場合の倒置の公式は以下の通りです。

① C+V+S

② C+S+V (主語が代名詞の場合)

つまりC(補語)が文頭に移動すると、SとVの語順がひっくり返るのです。
ただしSが代名詞の場合は、たとえCが文頭に移動しても倒置は起きません。
例文いくつかあげてみましょう。

(ex) Happy are the people who love flowers.
C V S

花を愛する人は幸いである

Right you are. ☞主語が代名詞の場合は「C+S+V」の語順になる。
C S V

君が正しい

「S+V+C」構文の倒置で、下線部和訳などで最も出題されるのが以下の2つの構文です。

① S+V+so ~ that S+V… 「とても～なので…する」

② S+be動詞+such that S+V… 「Sは大変なものなので…する」

この2つの構文については「so～」 「such」が文頭に移動すると、主節は疑問文と同じ語順になります。以下にその例をあげてみましょう。

(ex) So strong was his belief that he would never change his mind.

上の英文は元々、His belief was so strong that he would ~. という語順でしたが、so strong が倒置されて文頭に出た結果、このような語順になったのです。訳は「彼の信念はとても強かったので彼は決心を決して変えなかった」。

(ex) Such was his anger that he became ill.

上の英文は元々、His anger was such that he became ill. という語順でしたが、such が倒置されて文頭に出た結果、このような語順になったのです。訳は、

「彼の怒りは大変なものだったので、彼は病気になってしまった」。

(3)O(目的語)を強調するパターン。

O(目的語)をとる文型は「S+V+O」「S+V+O₁+O₂」「S+V+O+C」の3つがありますが、それぞれのOが文頭に出た場合、以下のような語順になります。

- ①「S+V+O」のOが文頭に飛び出すと全体は「O+S+V」の語順になる
- ②「S+V+O₁ O₂」のO₂が文頭に飛び出すと全体は「O₂+S+V+O₁」の語順になる
- ③「S+V+O+C」のOが文頭に飛び出すと全体は「O+S+V+C」の語順になる
⚠「C+S+V+O」のパターンはないわけではないが数は少ない。

要するにO(目的語)が文頭に移動しても、倒置(S+V→V+S)は起こりません。これもいくつか例をあげてみましょう。

(ex) This trip to Hokkaido, I will never forget.
O S V

今回の北海道旅行を私は決して忘れないだろう

上の英文は、元々 I will never forget this trip to Hokkaido. という語順だったものが、目的語部分が文頭に移動して、上のような「O+S+V」の語順になっています。

(ex) Whether he will come or not I cannot tell you.
O₂ S V O₁

彼がくるかどうかをあなたにお伝えできません

上の英文は元々、tell O₁ O₂(O₁にO₂を言う・伝える)を下敷きにした以下のようなSVO₁O₂だったのですが、O₂の whether節が文頭に移動してこのような語順になったわけです。

→ I cannot tell you whether he will come or not.
S V O₁ O₂

(ex) Jack I consider a coward[臆病者] if he does nothing for her.
O S V C

もし彼女のために何もしないのなら私はジャックを臆病者とみなします。

上の英文の下敷きになっている構文は consider O C(OをCとみなす)です。この構文のOにあたる Jack が文頭に移動し、このような語順になっています。元々は以下のような語順でした。

→ I consider Jack a coward if he does nothing for her.
S V O C

目的語が文頭に移動する場合の例外的なルールがひとつあります。それは、目的語に否定語(又はそれに準じる語句)がつく場合には、後ろ(主節)は疑問文と同じ語順になる、というルールです。

(ex) Not a word did I say.
O [疑問の語順]

私は一言もしゃべらなかつた

上の英文の場合、a word は(sayの)目的語なのですが、not という否定語と一緒に文頭に移動したために、主節は疑問文と同じ語順になっています。

(4)慣用的な「倒置」。

①仮定法の if が省略されると、条件節は疑問文と同じ語順になる。

仮定法のif節(条件節)の if が省略されると、その条件節は「疑問文と同じ語順」になります。わかりやすいように、if 節だけを取り出した例をいくつかまずあげてみましょう。

(ex) If I were a bird, → Were I a bird,
If I had had money, → Had I had money,
If it should rain, → Should it rain,
If I were to die now, → Were I to die now,

今度は、1つの文の形をした例をあげてみましょう。

(ex) Could I see him once more, I would be happy.
もし彼にもう一度会うことができればうれしいのですが

上の英文の前半は元々 If I could see him once more だったものが、If が省かれてこのようになりました。

この種の倒置の見きわめのポイントは以下の2つです。

①主節に「助動詞の過去形」「助動詞の過去形+have+p.p.～」がある。

⚠ただし If 節に should が入る仮定法(もし万一～なら)の場合、主節に、「助動詞の過去形」がこないこともあるので注意。

(ex) Should anyone call me, please take a message.

=If anyone should call me, please take a message.

もし万一誰かから電話があったら、伝言をきいておいてください

②?(クエスチョン・マーク)が文末にないのに、疑問文の語順になっている節が文中にある。

この2つのポイントがあてはまる英文に出くわしたら、(仮定法の) if の省略を疑ってみるといいでしょう。

②文のバランスをとるための倒置

1. 「There+V(be動詞・一般動詞)+S」

Vに be動詞がくるタイプについては、there is 構文としてみなさんにもおなじみのはずです。文頭を軽くするために there を文頭においてバランスをとっています。例をあげてみましょう。

(ex) There are some foreign students in our school.

私たちの学校には外国からの留学生が何人かいます

Vに一般動詞がくるタイプは、あまりなじみがないかもしれませんね。

⚠「一般動詞」とは、be動詞以外の動詞のこと。

この「There+V(一般動詞)+S」となる場合の V(一般動詞)には、come, live, remain, stand, exist などの「存在・往来」を表す動詞がきます。

(ex) There stands a castle on the hill.

丘の上に城が建っている

訳す場合には、(There は省いてしまい) A castle stands on the hill. と、頭の中で「S+V」の語順に戻してみるといいでしょう。

2.比較の than や as[so]~as の後の倒置

比較の than や as の後ろの「S+V」の「S」が長すぎる場合(や比較の対象同士を明確にしたい場合)に、SとVがひっくり返って「V+S」となることがあります。例をあげてみましょう。

(ex) He loves her more than does his big brother.

兄が愛するよりもっと彼は彼女のことを愛している

上の英文は、than 以下は本来 his big brother does[=loves] (her) となるべきところが、Sが長いためにSとVがひっくり返ってしまっています。なお than や as の後ろではVは、上例のように代動詞になることが多いです。上例では、一般動詞の繰り返しを避ける does が使われていますね。

語順

レクチャー1

間接疑問文の疑問詞節内の語順。

疑問詞節(又は whether[if]節)が文の一要素(S・O・C等)になる、いわゆる「間接疑問文」においては、疑問詞の後の語順が平叙文(つまり疑問文ではない普通の文)の語順に戻る点に注意しましょう。たとえば

When will he arrive?

と、疑問詞から始まる疑問文では、疑問詞の後ろは「疑問文の語順」になるのに、その when 節が目的語となった以下の英文では、when の後ろは平叙文の語順にしなければなりません。

Do you know {
× when will he arrive?
○ when he will arrive?
 [平叙文の語順]

(ex) I wonder why she was in such a hurry.

彼女はなぜあんなに急いでいたんだろう

He asked when the ship will set sail.

彼はいつ船が出帆するか尋ねた

レクチャー2

「do you think[suppose/ believe….]」と「do you know」の語順が狙われることがある。

「do you think[suppose/ believe….]」や「do you know」が疑問詞と共に使われる場合、「do you think[suppose/ believe など]」は疑問詞の後ろに置かれ、「do

you know」は疑問詞の前に置かれます。

そしてどちらもその後ろは「平叙文」の語順になります。

(1) 疑問詞+do you think[suppose/believe...]+平叙文の語順(S+V)?

(ex) What do you think I should do next?

僕は次に何をすべきだと(君は)思う?

(2) Do you know+疑問詞+平叙文の語順(S+V)?

(ex) Do you know what time it is now?

今何時か知っているかい?

レクチャー3

副詞の「so」「as」「how(ever)」「too」の直後に、冠詞の「a」を置くことはできない。

◎第十四章 形容詞・副詞の「レクチャー15」を参照せよ。

レクチャー4

その他の語順のルール。

(1)

「**形容詞(副詞・名詞)** + as + S+V」で「Sは~だけれど」。

(ex) Unbelievable as it was, I passed the entrance examination.

信じられないことだったが、私は入学試験に合格した

このように as の前に「形容詞(副詞・名詞)」が来る(譲歩を表す)構文があることを頭に入れておきましょう。この構文は though や although を用いて、以下のように書き換えることができます。

=Unbelievable though[×although] it was, I passed the entrance examination.

=Though[Although] it was unbelievable, I passed the entrance examination.

(2)関係詞とその先行詞は離ればなれになることがある。

(ex) The time has come at last when he must sell his horse.

[先行詞]

[関係詞節]

彼が自分の馬を売らなければならない時がついにやってきた

このような語順変化が起きる理由は、文全体の骨組み[構造]をわかりやすくするためです。上例でも、もし

The time when he must sell his horse has come at last.

と書いてしまうと、S(The time)とV(has come)のつながりがわかりにくくなってしまいます。それを避けるために関係詞節を後部に移動させているのです。

(3)「S+V+O+C」が「S+V+C+O」の語順になることがある。

どういう場合にこれが起きるかという、Oが長すぎる場合です。このように英語というのは長くなるとすぐに後ろに回されてしまう言語なのです。この(「長くなったら後回し」という)ルールについては、仮主語構文や仮目的語構文でみなさんもよく知っていますね。

(ex) Don't leave undone what you should do.

ⓧ

C

O

やるべきことをやらずに置くな → やるべきことをやりなさい

上の英文は元々「leave O C:OをCのままにしておく」の構文でできており、本来なら

Don't leave what you should do undone.

ⓧ

O

C

とすべきところですが、O(what you should do)が長すぎるためにOとCが入れ替わってしまっています。

(4) 「S+V+O+M(副詞)」が「S+V+M(副詞)+O」の語順になることがある。

これもそれが起きる理由は先程と同じで、Oが長すぎる場合です。下の英文を見てください。

(ex) He added to his tea a little sugar and milk.

彼は紅茶に砂糖とミルクを少し加えた

add は元々「add A to B:AをBに加える」という語法があり、本来ならその語順になるべきところが、目的語にあたるA(a little sugar and milk)が長すぎるために後回しにされ、to his tea と入れ替わって「add to B A」の語順になってしまっています。

He added to his tea a little sugar and milk.

B A

このタイプの倒置の見破り方として、「V+(前)+A(名)」という構造の後に、S・O・Cといった特定の役割を持たない「名詞」を発見したら、「S+V+M+O」型の倒置ではないかと疑ってかかってみると考えるのも一つの方法と言えます。

(5) 「同格節」と、それが修飾する名詞とが離ればなれになることがある。

同格の that節を例にあげてみましょう。

「思考」「認識」「発言」「事実」などを表わす名詞の後に、that節が置かれて、その that節が(直前の)名詞の内容を具体的に説明することがあります。

(ex) He denied the fact that he had not carried out his duty.

彼は自分が職務を果たさなかったという事実を否定した

上の英文でも、that節は直前の名詞(fact)を説明して言い換えています。

同格のthat節は「～という〇〇」と訳す。

ところがこの(同格の) that節と、それが修飾する名詞が離ればなれになることがあります。

(ex) The thought occurred to Mary that she might never see Jim again.

⑤[名詞] ↑ ⑥ [同格節]

ジムに会うことは二度とないかもしれないという思いがメアリーの頭に浮かんだ

☞「A(物事) occur to B(人):AがBの心に浮かぶ」が下敷きになっている。

このような語順変化が起こる理由は、そのままの語順だと読者からみて文構造がわかりにくくなってしまふからです。上例でも

The thought that she might never see Jim again occurred to Mary

と書いてしまうと、S(The thought)とV(occurred)のつながりがわかりにくくなってしまいますね。

レクチャー5

付加疑問文。

(1)作り方。

①肯定文の後には否定の付加疑問(isn't/doesn't/didn't等の短縮形を使う)をつける

(ex) Joe can drive, can't he[×Joe]? ☞末尾の名詞(主語)は、人称代名詞
ジョーは運転できるよね を用いる。

②否定文の後には肯定の付加疑問をつける

(ex) Sarah isn't angry, is she?
サラは怒ってないよね

③ただし命令文の場合は will you を文末につける

will you 以外にも won't you という言い方もあります。won't you? の方が will you? よりも丁寧で、勧誘の意を含む場合が多いと言えます。
否定の命令文には won't you? はつけられません。will you のみ可能です。

(ex) Don't touch the work, will you?
作品に手を触れないで下さいね

can't you と言うと、不満、批判の意味が込められます。

(ex) Speak more quietly, can't you?
もっと穏やかに話したらどうなの

④ Let's で始まる文の場合は shall we を文末につける

(ex) A: Let's go out to karaoke, shall we? カラオケに行きましょう
B: Yes, let's[No, let's not.] そうしよう[いや、よそう]

(2)注意点。

①文末の付加疑問の部分の主語は必ず人称代名詞にする

○ Tom broke the window, didn't he?

× Tom broke the window, didn't Tom?

②There is[are]構文の場合は、thereを使う

(ex) There is a park in this city, isn't there?

(3)発音する際の注意点。

念を押すときは下降調子、Yes, No の答えを期待する疑問の場合は上昇調子のイントネーションになります。

強調

レクチャー1

強調の副詞。

(1) very 以外の強調の副詞。

形容詞・副詞を強調する代表選手は very ですが、very 以外にも以下のものがあります。

① 「とても、大変に」… awfully, highly, extremely, terribly, really, simply

(ex) It's awfully hot today.

今日はとても暑い

Mr. Trump is a highly ambitious person.

トランプ氏はとても野心的な人物である

The test was extremely hard.

そのテストは非常に難しかった

Your mother is terribly worried about you.

お母さんはあなたのことをすごく心配しています

② 「全く、すっかり」… dead(ly)

(ex) All the members were dead asleep.

メンバー全員ぐっすり眠っていた

He was dead drunk.

彼は酔いつぶれていた

I was deadly tired at the night.

その夜、私はくたくたに疲れていた

③ 「全く」… absolutely

(ex) You are absolutely right.

君は全くもって正しい

absolutely は、意味的に尺度の両端にくるような形容詞にのみつくことができます。したがって absolutely good[warm] のような表現はしません。

- ④ badly は「必要、病気、被害」などを意味する文脈で用いられると「ひどく、非常に」という意味になることがある

(ex) I badly needed[wanted] the money.

どうしてもその金が必要だった

Some of the passengers were badly injured.

乗客の何人かは重傷を負った

The team was badly defeated in the finals.

そのチームは決勝でこてんぱんに敗れた

もちろん badly には、「悪く、まずく」「下手に」「間違って」という意味もあります。

(ex) She speaks badly of him.

彼女は彼のことを悪く言う

He plays golf very badly.

彼はゴルフがとても下手だ

それから badly の比較級、最上級はそれぞれ worse, worst となります。

(2) 疑問詞を強調する副詞(句)。

- ① 疑問詞に ever をつけて「疑問詞+ever」とすると、その疑問詞の意味を強調できる

(ex) Whoever said so?

一体全体誰がそう言ったのだ

Whenever I see this picture, I think of you.

この絵を見るたびに君のことを思い出す

- ② 疑問詞の後ろに以下のような語句をつけると、疑問詞が強調される

疑問詞 + $\left. \begin{array}{l} \text{on earth} \\ \text{in the world} \\ \text{the hell} \\ \text{the devil} \end{array} \right\}$ + 疑問文の語順？

その部分は「**一体(全体)**」などと訳すといいでしょう。

(ex) Why on earth did you do that?

一体全体どうしてそんなことをしたの

What in the world happened to him?

彼に一体何が起きたのか

What the hell are you doing here?

一体全体ここで何してるんだ

Who the devil is she?

彼女は一体は誰なんだ

レクチャー2

強調の形容詞。

(1) single。

single は「a single+単数名詞」で、「単一」であることの意味を強調します。

(ex) I didn't have a single penny with me.

私はびた一文も持ち合わせていなかった

There was not a single mistake in her answer.

彼女の答案には、ただの1つの誤りもなかった

(2) possible(〜でき得る限りの、この上ない)と imaginable(想像でき得る限りの)。

possible, imaginable は以下の場合、強調語として用いられることがあります。名詞の前、後ろどちらにも置けますが、名詞の後ろに置く方が強調の意味が強まります。

①(possible・imaginable が)最上級や序数と共に使われている

(ex) the best possible chance

この上もない好機

=the best chance possible

the worst imaginable record

想像し得る最悪の記録

=the worst record imaginable

②(possible・imaginable が) all, every, any, no などと共に使われている

(ex) I welcomed them with all possible kindness.

精いっぱいの親切で彼らを歓迎した

I'll do everything possible.

できる限りのことをいたします

I tried every method imaginable.

ありとあらゆる方法を試した

This is a book of no imaginable literary value.

これは文学的価値がまったくない本だ

possible, imaginable に限らず -able, -ible型の形容詞は、上記のルールがあてはまる場合、単独で名詞を後ろから修飾することがあります。その場合、(最上級の形容詞のついた名詞につけて)の名詞の範囲を限定する働きをします。

(ex) What I want is the latest information available.

私は欲しいのは入手しうる最新の情報だ

I'll leave here by the first flight available.

最初に乗れる飛行機で立ちます

上の英文の場合、available は直前の the latest information、the first flight を修飾しています。もちろん the first available flight、the latest available information としても間違いではありません。

(3)形容詞の very。

形容詞の very は(「the very+A(名詞)」 「one's very+A(名詞)」という形で)名詞を強調できます。

形容詞の very の訳し方は、基本的には「まさにその～」でいいのですが、細かなニュアンスの違いもあるので、下の例文でよく確認しておくといいいでしょう。

《適応性などを強調して》 「ちょうど」「ぴったり」「まさに」

《同一性を強調して》 「まったく同じ」「ほかならぬ」「～そのもの」

《驚き・事の重大性を示して》 「まさに」「ただ～(な)だけで」「～で[に]すら」

《反対を表す語を強調して》 「まったく(反対だ)」

(ex) Mr. Newman is the very person for the post.

ニューマン氏はその役職にまさにぴったりの人物だ

He met with the accident before[under] my very eyes

彼は私のすぐ目の前で事故に遭った

She has just arrived here this very minute.

彼女はたった今ついたばかりだ

The President talked to me in this very room.

大統領はほかならぬこの部屋で私に話しかけてくれた

The very thought of it is exciting.

そのことを考えるだけでもわくわくする

Kim came to dread his very name.

キムは、彼の名前を聞いただけで恐れるようになった

The monster's roar caused the very mountains to tremble.

その怪物の唸り声は、山をも震わせた

レクチャー3

強調語としての助動詞 do[does/ did]。

一般動詞の前に do[does / did]を置いて、後の一般動詞の意味を強める用法があります。

その場合「do[does / did]+動詞の原形」の形にします。命令文でも使えます。

和訳の際には「実際に」「本当に」などと訳します。例をあげてみましょう。

(ex) I do want to see her.

本当に彼女に会いたい

Do be careful.

十分に気をつけなさい

レクチャー4

強調構文。

(1)強調構文とは。

強調構文とは、It is □ that～ の形で、□の部分に自分が強調したい語(句・節)を入れるというものです。この強調構文をつくる that については、品詞は考えなくて結構です(関係詞だ、接続詞だ...と言い切れないので)。

下記の英文を強調構文にせよという場合、それぞれ以下のようになります。

I saw Jack at the party a week ago.

一週間前私はパーティでジャックを見た

① Jack を強調したければ

☞ It was Jack that I saw at the party a week ago.

② I を強調したければ

☞ It was I that saw Jack at the party a week ago.

③ at the party を強調したければ

☞ It was at the party that I saw Jack a week ago.

④ a week ago を強調したければ

☞ It was a week ago that I saw Jack at the party.

(2)強調構文か？ 仮主語構文か？ その見極め方。

It is ～ that … となるという点では、強調構文と仮主語構文は区別がつきにくいですね。そんな区別のつきにくい両者を、一瞬で見極める方法を紹介しましょう。

① It is と that の間に「形容詞・分詞」や「副詞(句・節)」がある場合

It is と that の間に「形容詞」や「分詞」があったら、それは仮主語構文と

みて間違いありません。

It is と that の間に「副詞(の仲間)」があったらそれは強調構文とみて間違いありません。

1. It is **形容詞・分詞** that **完全な文** . 📖 仮主語構文

2. It is **副詞(句・節)** that **完全な文** . 📖 強調構文

副詞(の仲間)とは、具体的には以下の3つです。

1. 副詞一語

(注)語尾が ~ly で終わることが多い。あるいは yesterday のような時を表す名詞も副詞として用いられることが多い。

(ex) It is recently that juvenile crime has been on the rise.

少年犯罪が増えたのは最近のことなんです

It was yesterday that I finished this work.

私がこの仕事を終えたのは昨日でした

2. 前置詞+名詞

(ex) It was at nine thirty that I came home.

私が帰宅したのは9時半でした

3. 接続詞+S+V~

(ex) It was since I was ill that I couldn't come here.

私がおこにこれなかつたのは病気だったからです

《もう一步深く!!》

ただし「前置詞+名詞」が形容詞句になっている場合は例外。仮主語構文とみなし、「前置詞+名詞」がC(補語)になっていると判断する。

そのような代表例としては「of+抽象名詞」や「beyond+範囲・限界を表す名詞」など。特に「of+抽象名詞」は形容詞化するというルールは頻出。

以下はすべて仮主語構文(that節が真主語)。

(ex) It is of importance that you should study hard.

=important

君が一所懸命勉強することが大事だ

It is beyond belief that he was killed in the accident.

=unbelievable

彼がその事故で死んだということが信じられない

It was beyond a joke that you said such a thing in public.

人前でそんなことを言ったのは冗談の域を超えている

② It is と that の間に「名詞(句・節)」がある場合

It is と that の間に「名詞(の仲間)」があった場合、that の後ろの英文が「完全な文」なら仮主語構文、「不完全な文」なら強調構文と見ていいでしょう。

1. It is 名詞 that 完全な文 . ☞ 仮主語構文

2. It is 名詞 that 不完全な文 . ☞ 強調構文

③ 注意すべきポイント

1. 「不完全な文」とは、S(主語)・O(目的語)・C(補語)のどれか一つが欠けた文のこと。

2. It is～thatの構文で、thatの後ろが「不完全な文」であれば、それは強調構文と見てほぼ間違いない。

💡 もちろん文頭のItが直前の単数名詞や直前の内容を指す代名詞、その後のthatが直前の名詞にかかる関係代名詞という英文中にもあるので、先頭のItが文中で役割を持っているかどうかを確認する必要がある。つまりそのItが「それ」と訳せるなら強調構文ではない。逆にそのItが訳がつかない(文中での役割を持っていない)のなら強調構文ということになる。下の英文は強調構文のように見えるが、Itは「それ」と訳せ、またthatは単なる関係代名詞で、強調構文ではない。

(ex) It rained suddenly. It was a problem that we had been worried about.

[関・代]

突然雨が降ってきた。それは私たちが心配をしていた問題だった

3.強調構文だとわかったら、It is と that をカッコでくくってしまうといい。
すると文の骨組みが浮かび上がってくる。

4.強調したい語(句)が「人」の場合は、that の代わりに who, whom が使われることもある。

(ex) It is Tom who broke the window.

窓を壊したのはトムなんです

It is Nancy whom Jack loves.

ジャックが好きなのはナンシーです

5.また強調したい語(句)が「物(事)」の場合は、that の代わりに which が使われることもある。

(ex) It is the dog which bit me yesterday.

昨日私を噛んだのはその犬です

會 bite(かむ)の活用は bite-bit-bitten。

It is the PC which I want to buy.

私が買いたいのはそのパソコンです

場合によっては(副詞句を強調した強調構文において) that の代わりに関係副詞が使われることもあります。

(ex) It was at that time when I first met him.

私が彼に最初に出会ったのはその時でした

6.強調構文が下線部訳問題になっていた場合、うまく和訳するポイントは、上記の例文の訳し方のように、強調されている語句を和訳の最後にもってくることである。

ただし、以下のように強調されている語句が「only+語(句・節)」の場合は、「～してはじめて(ようやく)…した」と、前から普通に訳せばいいでしょう。

(ex) It was only through their help that we coped with the crisis.

彼らの助けによってようやく私たちその危機を乗り切ることができた

7.イディオム的な強調構文として、以下の構文は頻出。

It is[was] not until～ that S+V…。 「～してはじめて…する[した]」

(ex) It is not until we lose our health that we realize its value.

健康を失ってみてはじめてその価値が分かる

8.疑問詞付き疑問文の強調構文。

疑問詞付き疑問文の強調構文の公式は以下の通りです。

疑問詞 is[was] it that+平叙文の語順？

要するに、疑問詞の後ろに「is[was] it that」を置き、その後を「平叙文の語順」に戻すわけです。たとえば以下のような普通の疑問文の場合、

(ex) What do you want to know?

君が知りたいのは何ですか

これを強調構文にすると以下ようになります。

What is it that you want to know?

[平叙文の語順]

和訳の際には is[was] it that の部分を()でくくってしまうといいでしょう(和訳は「一体全体」といった訳を付け足すといい)。